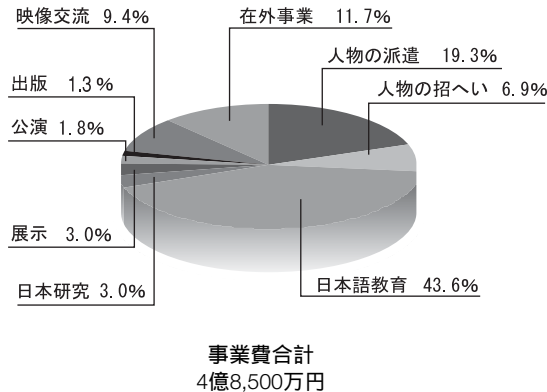


中南米

概要



対中南米地域の基金事業実績額は約4億8,500万円で、総事業費の約4%を占める。

中南米地域については、今後の中南米地域と日本との交流を一層促進する端緒となるような人物交流事業を重視しており、グアテマラ国立交響楽団会長、ニカラグア国立ルベン・ダリオ劇場館長、メキシコ国立シネマテーク事務局長、プエノスアイレス市立サン・マルティン劇場映画会企画ディレクターなど、文化人を招へいし、日本側関係者との意見交換の機会を設けた。

こうした人物交流の成果が、さらなる事業へつながった事例として、昨年度の中南米フェスティバル関係者グループ招へい事業がきっかけとなり、セルバンティーノ国際芸術祭やブラジルでの公演につながったパパ・タラフマラの「SHIP IN A VIEW 中南米ツアー」が挙げられる。今年度は、本事業のほか、チリでのコンドルズ公演や、キューバのベニーモレー国際音楽祭への参加事業などを支援した。

さらに、ホンジュラスへ派遣した演劇専門家が現地の劇団と協力した「米百俵」公演が話題となったほか、伝統音楽からジャズ、ラテン音楽、スポーツといった幅広い分野の専門家を、各地の「日本文化月間」の実施時期などに合わせて派遣した。また、「くまもとアートポリス展」「現代陶磁器展」「写楽再見展」などを日本の文化に触れる機会の少ない中南米各国で実施した。

メディア関連事業としては、サンパウロ、ブラジリア国際映画祭、アニメ・ムンディ国際アニメ映画祭を支援するとともに、中南米での「日本アニメ映画祭」の巡回、成瀬巳喜男監督特集のブラジル、アルゼンチン巡回などに協力した。また、波及効果の高いテレビ交流促進事業も進めており、『プロジェクトX：挑戦者たち』をエルサルバドルで放映し、大きな反響を得た。

一方、日本国内での中南米の文化を紹介する事業として、ブラジルの現代舞踊グループの京都ピエンナーレやダンスサミット2003への参加、コスタリカのダンスグループのJADE2003インターナショナル・ダンス・フェスティバルへの参加を支援した。

日本語教育については、日系人の子弟を対象とした日本語教育が始まった国においても、外国語としての日本語教育に移行してきている。こうした各国の状況に合わせた日本語教育の基盤整備を進めている。さらに、中南米における日本研究の実態を把握し、より効果的な事業展開を図るため、調査を行ないつつ、日本人客員教授の派遣、図書の寄贈などを通じて、日本研究拠点の形成を図り、研究者の育成やネットワーク形成に資する事業を実施した。

中米の貴重な文化遺産保存への協力として、ホンジュラスのコパン遺跡、グアテマラの国立考古学博物館へ、文化遺産保存専門家を派遣している。

海外事務所報告

メキシコ

メキシコ事務所

1. 概況

2003年7月に行なわれた中間選挙では与党である国民行動党が敗北、議席を大きく減らし政治運営に支障をきたす傾向がますます強まった。フォックス政権は低迷する財政収入に対する税制改革案として消費税(IVA)を現行の15%から13%に下げ、所得税減税をする代わりに、流通・卸売部門に8%の税金をかける法案を国会に提出したものの、議会の多数派を占める野党が反発、法案は棚上げになるなど、政治的な混迷が続いている。

また10月にカンクンで開催されたWTOのサミットでは、反グローバリズム主義者による連日の集会やデモが目立つ結果となった。

文化面ではラテンアメリカ最大規模の芸術祭であるセルバンティーノ国際芸術祭が資金不足で日程調整が難航し、例年5月に実施される総合紹介イベントが8月までずれこむなどの混乱が起きたが、招待国であるドイツ、フランスを中心としたハイレベルの舞台芸術作品が上映された。そのなかで日本の現代パフォーマンスアートグループ「パパ・タラフマラ」の公演“Ship in a view” (基金助成事業)がマスコミに大々的に取り上げられ、大きな反響を呼んだ。

2. 日本との文化交流事業

2002年度に引き続いて、当地日本大使館・日系団体共催の日本文化月間「プレセンシア・デル・ハボン(日本のプレゼンス)」がメキシコシティを中心に8月から11月の4か月間にわたり大々的に催され、展覧会やコンサート、講演会や日本映画上映会など、約30の催し物が行なわれ、連日大勢の人がつめかけた。

商業映画では宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』や北野武監督『Dolls』が公開され、大好評を博した。また国立シネマテークでは「黒澤とシェークスピア」と題した黒澤明監督特集が行なわれた。そしてメキシコ大手シネコンであるシネメックスが企画開催する現代映画国際フェスティバル(FICCO)に『沙羅双樹』(河瀬直美監督)や『アカルイミライ』(黒澤清監督)、『殺し屋1』(三池崇史監督)等の作品が出品されて好評を博すなど、多くの日本映画が紹介され、あらたな日本映画ブームが生まれつつある。

展示ではカリージョ・ヒル美術館所蔵の浮世絵展が同美術館で開催され、日本の都市工学・都市文化論を専門とするガルシア・モンティエル氏による卓越した浮世絵に関する研究調査によりキャプション説明等の充実した、レベルの高い展覧会となった。

3. メキシコ事務所の活動

<活動方針>

過去4年間で確立した事務所広報機能(広報誌「パティオ」、ホームページ)を見直し、より一層の充実をはかった。広報誌はそれまで年4回刊行していたものを3回としたが、その分表紙デザインの更新、地方の日本語教育事情、日本語教育アドバイザーによる日本語教育ページ、イベント・基金事業・文化交流特集のページを充実させた。ホームページには新たに掲示板を設置し、日本語教師や在墨日本文化人の情報交換の場として提供した。双方ともメキシコおよび他のスペイン語圏中南米諸国の日本・日本語研究機関や在外公館の間に確実に定着しつつある。

日本語分野に関しては、メキシコ日本語教師会の法人化、日本語能力試験受験者数の増加等、日々発展しつつある当地の日本語教育分野をサポートすべく、各種セミナー、研修会の実施、日本語機関調査などに事務所として積極的に関わった。

<2003年度事業例>

●「写楽展」(2003年5月6日～6月22日)

日本を代表する浮世絵作品「写楽」を多角的に捉えた作品展覧会を有力企業ブラサ・インプルサの2箇所のショッピングモ-

ルで実施し、オープニングでは展覧会に先立ち写楽にちなんだパフォーマンスを行ない大勢の観客を集めた。

●日本アニメ映画祭(2003年9月17日～21日、メキシコ国立自治大学内映画館ホセ・レプエルタス)

高橋良輔監督『沈黙の艦隊』のオープニング上映を皮切りに、ハリウッドの大ヒット映画『マトリックス』に大きな影響を与えたとされる押井守監督『攻殻機動隊』等、日本のアニメ映画作品の上映会を実施。学生や映画関係者を中心に連日多くの観客で賑わった。

●日本アニメ講演会(2004年3月11日、国立工科大学内講堂マヌエル・モレノ・トレス)

高橋良輔、指田英司両氏による「ジャパニメーション1963-2004」と題した日本アニメの講演会を実施。日本アニメ、文化に興味のある学生を中心に講演会場は満席になった。講演は日本アニメ制作の系譜、現状を映像・画像資料を交えながら非常にわかりやすく好評であった。講演会後には両専門家にサインを求める長蛇の列ができ、そのほかにもメキシコのアニメ同好会のインタビューや、一緒に写真を撮るなど、終始和やかな雰囲気であった。

ブラジル

サンパウロ日本文化センター

1. 概況

2003年のブラジルの貿易収支は、前年度を89%上回る史上最高の約250億ドルの黒字を記録した。急激な経済成長を遂げる中国にブラジルから大量の原材料や農産物が流れ込む構図となったため、ブラジル産業界にとって中国の重要性が改めて認識されることとなった。中国との関係の緊密化は文化交流にも及び、西安市の歴史文化財修復事業をブラジル側が資金面で支える試みも始められることとなった。

デザインとファッションの世界ではいくつかのブラジル製品が注目を集めたが、カンパーナ兄弟によるインテリア・デザインはその代表例である。中でもユーカリの木くずを素材とした「ファヴェーラ椅子」はニューヨーク近代美術館に所蔵されるなど高い評価を得た。一方、ビーチ・サンダルの「ハワイアナス」はカラフルで楽しいデザインで世界的なブームを巻き起こした。同社の国際部長で日系人のアンジェラ・ヒラト氏によると「このサンダルの原型は日本移民がブラジルに持ち込んだ草履にその原型がある」とのことで、ブラジルの多民族文化としての特徴が国際的な人気製品を生んだともいえる。



写楽展



日本アニメ講演会

2. 日本との文化交流事業

2003年は映画『シティ・オブ・ゴッド』の公開、ネルソン・フレイレ氏(ピアノ)やジョアン・ジルベルト氏(ボサノヴァ)の来日公演のほか、ブラジルの現代建築が専門誌で特集されるなど、日本では静かなブラジル・ブームの年となった。

一方ブラジルにおいては、戦後ブラジル移住再開50周年を記念する式典が相次いで開催され、日本各地から知事や議員らが多数来伯した。また、ブラジルへ移住した人々を描くNHKドラマ『ハルとナツ・届かなかった手紙』の制作発表が行なわれ、さらには2008年のブラジル日本移民100周年を控え記念祭典協会が発足、記念事業案が募集されるなど、例年にも増してブラジル移住を足場とした交流が目立った。

なお、外国人犯罪が社会問題化するなか、来日外国人少年刑法犯の国籍別検挙数でブラジルは全体の65%を占めている。日本へ渡航したブラジル人就業者およびその家族の滞日は定住化を含めて長期化の傾向にあり、子弟の教育や地域社会との関係構築などの面で深刻な課題を抱えている。課題克服のため既に日本各地でさまざまな試みが行なわれているが、ブラジルにおいてもブラジル日本文化協会が出稼ぎ子弟教育委員会を創設しこの問題に積極的に取り組むなど、両国双方において問題を真剣にとらえる動きが顕著となった。

3. サンパウロ日本文化センターの活動

日本文化紹介を目的とした事業を企画・実施する一方、日本文化とブラジル文化の比較や交差を取り上げる現地芸術家や文化人の企画も受け入れて実施している。ブラジル国内の文化機関からも日本文化の発信拠点として認知され、基金事業への関心のみならず、文化一般の情報提供や文化事業政策の面での助言やアドバイスの要請も高まってきている。

<2003年度事業例>

- 「**舞踏の軌跡**」(2003年9月、SESC(商業連盟社会サービス)アンシエッタ劇場/サンパウロ、サンパウロ州アララクアラ市、サントアンドレ市、サンカルロス市、リベイロンプレットの各都市におけるSESC劇場)

70年代後半にブラジルに渡った故楠野隆夫氏がブラジルにおける舞台芸術、とくに現代舞踏に与えた影響を振り返る試みとして、事業全体に「舞踏の軌跡」のタイトルを冠して舞台公演、パネル・ディスカッション、ワークショップ、写真展、ビデオ上映会を実施した。

大野慶人、笠井勲、イズマエル・イヴォ(ドイツ在住ブラジル人)、舞踏舎・天鷲、和栗由紀夫、佐々木満(ドイツから参加)、



舞踏の軌跡

ブラジル国内からは、マルタ・ソアーレス、コンパニア・タマンドゥア・デ・ダンサ・テアトロ各氏が参加し国際色豊かな事業となった。

7日間にわたる公演は毎回満席を記録し画期的な事業となった。マスコミにも好意的で充実した記事が掲載されるなど、日本の舞踏界の大御所が当地で展開した交流は大変意義深いものであった。また、派遣助成と現地での事業実施が功奏した好例ともなった。

- パバ・タラフマラ「船を見る」公演**(2003年11月、SESCピラ・マリアナ劇場/サンパウロ)

ブラジルにおける日本の舞台芸術紹介が古典芸能か舞踏に偏りがちであった中で、ダンス、演劇、美術、音楽が融合した同カンパニー独自の表現は、いわゆる日本らしさを脱した現代的で普遍的なものとして新鮮な感触をもって観客に受け止められた。

また、代表の小池博史氏らによるワークショップも好評であった。基本的な動きから参加者全員による小作品の制作・上演まで3日間にわたってさまざまなジャンルのダンサー、女優俳優らが指導を受けた。

公演およびワークショップの成功に加えて、同カンパニーとサンパウロの文化機関との間に今後の作品制作に向けた共同の可能性が開けたことも大きな収穫であった。一回限りではなく継続性を備えた交流へと発展しつつあり、さらなる関係の深化が期待される。

- 富野由悠季監督アニメ講演会**(2004年2月、リオデジャネイロ州立大学/リオデジャネイロ、3月、サンパウロ市立文化センターおよび国際交流基金サンパウロ日本文化センターホール/サンパウロ)

『機動戦士ガンダム』シリーズで著名な富野由悠季氏を迎えてリオデジャネイロとサンパウロで講演会を実施した。また、サンライズの協力を得てアニメ上映を行なったほか、現地共催者によるポスター、ガレージキットの展示なども並行実施された。

講演のテーマは「なぜ日本でロボットアニメが生まれたか？」であったが、ロボットアニメにとどまらず日本の文化の歴史的な背景やその特質に踏み込んで文化的、学術的な考察を交えた日本文化論が展開された。20代中心の観客が熱心に耳を傾け、文化紹介のみならず対日理解の促進の面でも大いに成果があった。

世界的なアニメ・ブームはブラジルにおいても例外ではなく、サンパウロやリオデジャネイロにおける代表的なアニメ・フェスティバルに集まるファンは数万人にも上っており、アニメやマンガを取り上げた交流事業の実施には大きな期待が寄せられている。



富野由悠季監督アニメ講演会